運命のマスティマ　ミシェル過去編

鏡　香夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
運命のマスティマ　ミシェル過去編

【Ｎコード】
Ｎ２８４２Ｙ

【作者名】
鏡　香夜

【あらすじ】
十歳のとき、マフィアの抗争に巻き込まれた私。救ってくれたのはマスティマという闇組織。
恩を返すべく組織のコックを目指して、いざ修行開始！
料理習得のために国々を回る。世界は広くて、色んな人がいて……？
「運命のマスティマ」の主人公、ミシェルの修行時代、奮闘記。
（シリーズものですが、この話単独でも読める内容になっています）

1. あの夜

十年前の夜、父と私はマフィアの抗争に巻き込まれた。
父は小さな料理店の経営者にして唯一人のコック。そして、当時の私は、ようやく自分でおさげ髪を満足に結えるようになったばかり。若干十才の少女でしかなかった。
その夜は、貸切りの予約客がいて、私も顔見知りの人だった。
ウェイトレスの真似事を始めていた私は、大好きな父の手伝いをしたくて、無理を言って店に入り込んだ。
それがあんなことになろうとは……。
飛び交う銃弾。男達の怒鳴り声。弾けるガラス。テーブルは押し倒され、椅子も床に転がった。
何が起こったのか分からず、茫然と立ちつくしていた。私を守るために父は被弾した。
混乱した状況から私と父を救ってくれたのは黒いコートの人たち。
それが闇組織マスティマだと知ったのは後になってのことだった。彼らは襲撃者を倒し、狙われていた人物を助け出した。
それがレストランの常連客だったブルーノさん。祖父の代から店に来ていたというこの人は、父とも親しかった。
「やあミシェル、元気かね」
こんな風に、子供の私にも気さくに話しかけてくれる、優しいおじさん。
黒い髪に黒い口ひげを生やし、お洒落にスーツを着こなしている。小物使いもさりげなく、シックだが存在感のある指輪をいつも身に着けていた。トレードマークのハットにステッキは見るたびに違うもの。
いつもスーツ姿の二人の男と一緒に店にやってきた。
そんな彼がイタリアでも指折りのマフィア、マロッチーニ・ファミリーのボスであることなんて知らなかった。

まだ十才だった私。知識なんてほんの狭い周りのことのみ。
父が撃たれた時もできたのは泣くことだけ。非力な子供でしかなかった。

父の店で襲撃を受けた夜のことは鮮明に覚えている。守られた私だけが無事だった。ブルーノさんやその部下達も銃弾を受け、同じ病院に運び込まれた。
鳴り響く救急車のサイレン、慌しく処置をする医師や看護師達。病院の匂いや手術室の場所だって忘れていない。
父の手術は成功して、次の日の昼には意識を取り戻した。山は越えましたとの医師の言葉だったが、母は看病のために病院に泊まりこんだ。私は家に帰ったが、学校が終わるとすぐ祖母と共に見舞いに行った。
父の容態が急変したのは三日後のこと。
その時の記憶は、はっきりとしない。病院にいて、父のベッドに駆けつけたはずなのに。
悪い夢を見て、目覚めるとそれが何だったかを忘れてしまった時のようだ。
最初に気付いたのは祖母だった。なんの変哲もなく訪れた朝。ベッドから起きだして朝食をとり、いつもどおり学校に行こうとした私を引き止めたのが彼女だった。今日は葬儀の日だからとの言葉を私は唖然として聞いていた。
棺に移される前、病院での最後の面会で繋がった前日までと今。静かに横たわる父の姿を目にすると、涙が溢れて止まらなかった。
父を失ってしまったという悲しさで押しつぶされそうになりながらも、私は自分の無力さを感じていた。同時に私のせいなのだという思いも募った。
私をかばって父は倒れた。一人だったら、裏口からうまく逃げ出せていたかもしれない。私が店にいなければ、死なずにすんだかもしれないのだ。

誰もそれを口にはしなかったけれど、その考えに至れないほど私は幼くもなかった。
憔悴した母の顔。いつもは、はつらつとして明るい人なのに。私を気遣って笑顔を見せて話しかけてくる。子供ながらに苦しかった。
変わらず接してくれる祖母にも心の内を話すことができなかった。
祖母が責めたのはブルーノさんだった。葬儀にやってきた代理人の参列も許さなかった。
ブルーノさん自身はその時、まだ入院中だった。銃弾摘出のための手術が必要だったのだ。
術後一ヵ月、退院した彼は、すぐにうちにやってきた。杖をつき、部下に支えられながら。
だが、祖母は玄関先で箒片手に追い返した。周りが慌てるほどの辛らつな態度だった。
マフィアだろうとなんだろうと祖母には無関係。祖父の友人でもあり、古くからの知り合いである彼に容赦はなかった。
それでもブルーノさんは何度も家にやってきた。父の死の責任を取ろうと、私の後見人を名乗り出た。
祖母は良い顔をしなかったが、私は彼の申し出に甘えた。家にいて、彼女や母と顔をあわせていると辛かった。
父の死で、ぽっかりと心に開いた穴。それは彼女達にしても同じだったと思う。その時の私は自分のことだけで精一杯で、なにもできなかったけれど。
逃げるように屋敷にやって来る私に、ブルーノさんは優しかった。
事件のことは一切触れることはせず、毎回私が喜びそうなお菓子を用意して待っていてくれた。

マスティマの話はブルーノさんの前ではご法度だった。言葉を重ねるたび、空気が重くなっていくのを感じた。詳しく尋ねる事なんてできなかった。
こういう雰囲気になるのは、関わるなとの無言の圧力だ。マフィ

アや麻薬等の話も同じ。とたんにブルーノさんの声はずっしりとした石のようになった。
それは子供の私には、どんな言葉よりも雄弁なもの。
それでもマスティマへの思いは、ともし火のように、細くなることがあっても消えることはなかった。
彼らがいなければ、私もまた死んでいただろう。父にも短いが三日間という時間をくれた。その間に交わした会話の数々は今でも心に残っている。
今の私があるのもマスティマが来たからこそだ。あの夜の無力で脅えた私とは正反対の存在。
彼らに近付きたいとは思いながらも、どうやったら関われるのか、分からずにいた。父を亡くして間もない心は沈みがちで、持ち前のきかん気も影を潜めていた。
慰めだったのは、ブルーノさんの屋敷の庭で、飼われているラッテという名のクリーム色のマスティフ犬と遊ぶことだった。余談ではあるが、このラッテは後にネーロとカフェラッテの母親となる犬だ。
がっしりとしていて頼りがいがあるのに、他ならぬ母性を感じさせる、この優しい生き物に私は救われた。
ブルーノさんが留守のときも庭に入れてもらい、ラッテと過した。ラッテは有能な番犬の一頭だった。
人に懐かせることに対して苦言を呈する部下もいたが、ブルーノさんは「あの子のしたいように」と許してくれた。
最初、受け入れてはくれなかった他の犬たちから、身を張って守ってくれたのもラッテだった。
彼女は私の守護者だった。膝を抱えて座り込む私の傍にいつもいた。二つの後ろ姿は、まるで二頭の犬のようだとブルーノさんは柔らかく笑ったものだ。
彼女の落ち着いた息遣いや穏やかに打つ心臓の音、私の頬を舐める柔らかい舌と愛情深い黒い瞳が大好きだった。

何時間でも辛抱強く付き合ってくれた。言葉など超えた理解がそこにあったように思う。

犬舎の中で寄り添ったまま眠ってしまい、そのまま夜を迎えて、行方不明になったと心配されたこともあった。

服を涎だらけにされたり、泥まみれになったり、母に眉を寄せられたことも一度や二度ではない。だけど、この時、私の支えだったのはこのラッテだったとはっきりと言える。

私は癒やされ、次第に父と共に失くした物を取り戻そうとしていた。

そんなときだった。自分の進むべき道を知るきっかけが訪れたのは。

それは自然でありつつも劇的な出会いだった。

1．あの夜（後書き）

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします　（ランキングの表示はＰＣのみです）

2．魔法の国

庭に流れてきた刺激的で芳醇な香り。これはニンニクと唐辛子。源はきっとアーリオ・オーリオ・エ・ペペロンチーノだ。

夕食前だった私のお腹が何よりも正直に反応する。その音に傍にいたラッテが驚いたほどだ。

お腹を押さえながら、そろりと地面から立ち上がる。

父も家でよく作ってくれたっけ。そのペペロンチーノの匂いによく似ている。私は引きつけられるように匂いの流れてくる窓に寄っていった。

窓の向こうには白衣の背の高い男の人。コックの姿だ。ブルーノさんより年配そうだが、その背筋はピンと伸びている。痩せ型で灰色の薄い頭髪。細い眉は神経質そうに見える。

彼は窓の外に私の顔を見つけると、微笑んだ。

「お嬢ちゃん、お腹すいてんだろう。入っておいで」

そう声をかけてくる。

これがブルーノさんの家の料理人、レオ・デ・サンティスとの出会いだった。

レオの料理は父のものとは、まったく異なっていた。

まとまりがあって優しい父の味に対し、おおらかでエネルギーを感じさせるもの。

それは、何かにつけ彼の料理を味わうようになった私の実感だった。同時に興味がわいた。

父とは違う白衣姿。料理をする彼の背中を見るたびに、うずうずと高揚した気分になった。

父の死後、墓場のように感じていた厨房は、春を迎えたように息吹に満ちた。これこそ魔法の国だ。またここに戻ってこられようとは。

間もなく十三歳になろうとした頃、私はレオに料理を教えて欲しいと申し込んだ。
私にはおそらく他に才能はない。だけど、料理人としてなら、きっとやっていける。腕を磨けばマスティマのコックにだってなれるかもしれない。そう確信めいた思い込みが私を衝き動かしたのだ。

あの夜の事件で、ブルーノさんは脊椎を痛め、やがて車椅子に頼ることになった。そんな生活を少しでも豊かにしようと部下が捜してきたのが、レオだった。
ブルーノさんより七才年上のレオは、ホテルの料理長を退職して間もなかった。何人もの後輩を一人前に育てた実績は伊達ではなかった。
中学校の放課後、駆けつける私を決して子ども扱いしない。彼の信条は、厨房に立てば男も女も若いも老いもないというものだった。
最初は掃除や皿洗いに始まり、下ごしらえと徐々にやることがランクアップしていった。
間違ったことをすればマシンガンのようにノンストップで咎められる。弁解の暇なんてない。私はカカシのように突っ立ち、嵐の過ぎ去るのを待つだけだ。
だが、彼の求めに応じることができると、これまた盛大に褒めてくれるのだ。
「お前は天才だな、ミシェル」
私の頭をわしわしとかき混ぜる。三つ編みに結った髪が一気にボサボサになってしまう。
上機嫌に笑い声を上げるレオは、この時ばかりは印象がまるで違う。一見、偏屈な頑固親父のように見えるのに。
飴と鞭は使いよう。まさにその言葉を実践しているような人だった。

レオ以上に私を後押ししてくれたのは、厨房を訪れる、一人の客

だった。
「お腹すいたー。なんかなーい？」
そう言って、駆け込んできて、行き倒れのようにテーブルに突っ伏す。
私の姿を見つけて、顔を輝かせるこの子はソニア。ブルーノさんの孫娘だ。
最近近所に越してきたという彼女は、毎日のように祖父の家を訪れた。彼女曰く母親の料理よりもレオの料理の方が美味しいからだそうだ。
Tシャツにデニム地のオーバーオールという服装。短く刈られた栗色の髪のせいで、男の子と間違えられることも多いらしい。
ややつり目な瞳とちっともじっとはしていない様子は、イタズラ好きの子猫のようだ。
平均の身長より低く、私より一回り小さい体は、彼女の炎のような気質を覆うには頼りないように見えた。
いつも喧嘩に勝って、誰それを泣かせたと得意げに語っていた。しかもその名前からして、みんな男の子。
彼女の体には生傷が絶えず、服が破れていることもしばしばだった。
「みんな弱っちーもん。敵じゃないよ」
ぱっぱと服をはたきながら、あっけらかんと笑う。頬の絆創膏は勲章みたいなものだ。
私より一つ年下、一人っ子だという彼女は私を姉妹のようだと慕ってくれた。
レオに料理を習い始めて、最初に作った料理を味わってくれたのも彼女だった。
オーダーはミラノ風リゾット。
スプーンが口に入るまでドキドキだったが、ソニアは目を丸くして言った。
「爺(じじ)にも食べさせてあげないと。私だけ食べたら、きっと怒られる

よ」
そう言いながらもスプーンは止まる様子を見せない。一気に食べ上げてしまう。
何よりもの賛辞。あまりの嬉しさに彼女を抱きしめた。
この日から、ソニアは私の試験官になった。
彼女の言葉は率直で、ごまかしがなかった。レオも認める味覚の持ち主で、決して中途半端なことは口にしない。不味いときは不味いとはっきりと言われたし、一口目の表情を見たら分かる。へつらっての二口目なんて決してない。
それでも、美味しいときにはこちらが舞い上がってしまうほど褒めてくれるのだ。
天井を見上げての感嘆の声。「ほっぺが落ちそう」とか「美味しくて死んじゃいそう」とか。
飛び切りの笑顔で料理を頬張る彼女を見るのが、私の一番の原動力となった。
人に喜んでもらえる物を作りたい。当時のことを振り返ってみると、料理人の原点ともいえるその思いは、この頃培われていたように思う。

2．魔法の国（後書き）

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします　（ランキングの表示はＰＣのみです）

3．悪意ある天使

こうして、ずっとイタリア料理一辺倒だったが、しばらくすると欲が出てきた。それにマスティマのコックを目指すなら、レパートリーが多いに越したことはないはずだ。

あるとき、レオが勉強にと連れて行ってくれた、フレンチ・レストランでの料理を口にして決心がついた。

レオは驚いていたようだったが、快く紹介状を書いてくれた。

パリで料理の修業をする手はずを整えてくれたのだ。どうせやるなら、本場で学んだ方がいいというのが彼の意見だった。

もちろん、その頃まだ十五才。学生だったので、夏休みや冬休みなど長期の休みのときだけだ。その間、レストランの一画を仮住まいとさせてくれるということだった。

父親が英国人でよかった。父が生きている頃、家の中では三ヶ国語が入り混じって飛び交っていた。父の英語、母のイタリア語、祖母の日本語。ナチュラルなトライリンガル教育だ。

フランス語はできなかったため、最初は英語と身振り手振りで会話を成立させた。

新たな先生であるジャンは、シェフでありながらも経営者としても有能な人だった。レストランはパリだけでなく、リヨン、マルセイユ、ニースに四店舗を展開していた。

くるくると渦を巻く金髪のせいで、本の裏表紙を飾るポートレートは芸術家を思わせた。

ちなみに彼の書いた料理本はかなりの売れ行きらしい。テレビ番組でもコーナーを持っていて、業界どころか巷でも有名人。そんな彼の料理は、質も伴っていて、上品でいて豊潤なもの。

分刻みのスケジュール。多忙な人なので毎日教えてもらえるわけじゃない。だけど、パリに戻った際には、朝一番とか閉店直前とか、少しでも時間を割いて様子を見にきてくれた。

もっぱら指導してくれるのは兄弟子たちだった。
弟子といっても、いつひとり立ちしてもおかしくない立派な料理人たち。私以外の三人はみんな男で、年上であり、妹分として可愛がってくれた。
私は人間関係に恵まれていると思う。嫌いとか生理的に受け付けないとかそういう人が回りにいたことがない。
そんな人は世界の外にいて、私とは関わりを持たない人たちなのだと信じていた。
だが、十七才の夏休み、世の中そんなに甘くないことを知った。
私の前に現れたのは、師匠であるジャンの息子のカミーユ。
二十歳だという彼は、天使のように見えた。長身で、父親譲りの金色の髪は絵画の天使のような巻き髪で、鼻筋は通り、薄青の瞳は大きくてパッチリとしていた。要するに美男子で彼自身もそれを自認していた。
跡継ぎとして勉強のため、店にやってきたと聞いていたが、私には他の目的でとしか思えなかった。
始まりは店のウェイトレス。
兄弟子の一人との仲を引き裂いてしまった。兄弟子は失望の末、店を去ってしまった。
ひどいことをするとは思ったが、本気ならば仕方がないのかもしれない。そう善意的に考えていたのだが、状況が変わってきた。
その彼女とも長続きせず、他のウェイトレスにも手を出し、ついには女性客にまで及び始めたのだ。
私は彼が好きじゃなかった。自慢の髪を梳きながらの調子の良い語り口。父親の財産をちらつかせる言い草。一度に何人も関係を持ち、それをひけらかす節操のなさに至るまで。
どうしてあんな立派な人の息子がこんな風なんだろう。世の中は理不尽だと思い知らされる。
とにかくこういう人には関わらないのが一番。そっと遠くから見守ろう。そう決めた矢先のこと。

「ねえ、ミシェルはこんな仕事、本当にやりたいと思ってるわけ？」
なるべく避けていたのに、ついに火の粉が降りかかった。
「コックは面白いですよ、ロジェさん」
ファミリーネームで言い返す。ファーストネームで呼び合う仲ではない。今までほとんど話したこともないのに。
それに料理人の息子なのに、父親の仕事を馬鹿にしているような言い草。胸にもやもやしたものが溜まってくる。
「そうかな。割に合わない仕事じゃない？　朝早くから夜遅くまでなんて。僕の彼女にはそんな仕事はさせたくないね」
なら、どうして厨房なんかに入ってくるんだろう。私は好きでやってるんですと叫びたくなった。
だけど、彼は、師匠にしてオーナーの息子。腐ってもなんとやらというやつだ。
声を上げる代わりに、生ゴミで膨れたビニール袋を手に取った。途端に退く彼の前を抜けて勝手口を目指す。思ったとおり、彼は付いて来なかった。
これで一安心、こちらが気のない素振りを見せれば、相手にだって伝わるはず。そう思っていたのだが、違った。
この日以降、カミーユは何かというと私の傍に来て、自分をアピールし始めた。
お茶をしないか、遊びに行かないか。言葉での誘いも尽きない。
兄弟子たちも来るからと飲みに誘われたこともあった。それならと行ってみたら、彼しかいなくて、二人で並んで座ったカウンター席で急接近。手を握られたり、肩を抱かれたりした。唇が耳たぶに触れそうな位置での甘い囁き。さらに太腿まで触られた。
これには驚いてグラスをひっくり返し、中身を彼のズボンにぶちまけてしまった。さすがに気まずくなって、ひとしきり謝った末、店を出た。
誘いには乗らないことに決めたのは、この一件だけのためではない。閉店後の店でウェイトレスと二人っきり、濃厚な親密さを匂わ

せる場面に出くわしたのも理由の一つだ。
事前か事後かどちらとも取れる雰囲気。それも付き合っているはずの人とは別の人だった。
カミーユという人はどうも、恋人なんてその場にいなければ、フリーと同じ。そんな考えの持ち主のようだ。
誘い文句は挨拶代わり。断られてもまったく気にする様子がない。
こちらの都合なんて聞く耳を持たず。奇妙なプライドが耳を塞いでいるのだろうか。自分に関心を示さない女なんてありえないというような。
「ねえ、僕のなにが気にいらないわけ？」
ある日、とうとうそんなことを尋ねられた。
一人残って最後の片付けをしているときだ。今日は店を閉めるずっと前に姿を消したのに、また戻ってくるなんて思いもしなかった。
私は鍋を磨くことに集中する。この心理的拷問のような状況から逃れるには鍋こすり、つまりは現実逃避しかない。
「どうやったら仕事をしやすいか考えたりしないの、君は」
「……どういう意味ですか、それ？」
私は手を止め、初めて彼へと向く。思わせぶりに目を細めた姿はもう天使とはほど遠い。口元に浮かんでいるのは意地の悪そうな笑みだ。
「別に。頭を使ったら分かることだろ」
自分になびかない女は愚かだとでも言いたいのだろうか。
彼の思考回路はまったく分からなかったし、理解したくもなかった。私は小首を傾げただけで返すと、磨いた鍋を棚に戻し、今度は包丁を引っ張り出した。
刃の様子を翳して曇りを見る。後ろに気配がまだあるので振り返った。
カミーユは滑稽なほどに慌てて距離をとった。私がキレて、これでブスリとやるとでも思ったんだろうか。大事な調理用の包丁をそんなことで台無しにするわけがないのに。

これまた自前の砥石を取り出して、刃を砥ぎ始めると、さすがに諦めたらしい。足音が遠ざかっていった。

ふうと息をつく。料理を学ぶためにここに来たのに、これじゃ集中できない。そうでなくても夏休みの間の短期決戦。ほかの事に気持ちを割いている余裕はない。

前途は多難だと思わざるを得なかった。

3．悪意ある天使（後書き）

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします　（ランキングの表示はＰＣのみです）

4．盆休み

三ヵ月半の貴重な夏休み。それでも三日間の休みを貰って、八月の中ごろ、フランスからイタリアに戻ってきた。

何もカミーユのせいではない。あれから、閉店後の店で迫られて際どいところを兄弟子の登場で救われるということがあったけど。無防備だった私にも責任はある。

にしても、料理の修業に来ていながら、こんなことまで頭を使わなければいけないのは、辛いところだ。

さて、今回の帰省の理由は三つある。

一つは祖母から帰ってこいコールがかかったから。

家族揃って墓参りに行くといって聞かないのだ。なんでも日本には、この時期、お盆と呼ばれるものがあるらしい。天国から帰ってくる家族をお墓まで迎えに行く慣わしだというのだ。

私の家族で亡くなっている人と言えば、祖父と父だ。

面識のない祖父は生粋のイタリア人だし、父だってイギリス人だ。日本人ではない二人がそんな風習を知っていたかも怪しいところだが、母にしろ私にしろ、祖母を納得させることは不可能だった。

結局、帰省一日目は墓参り行くことになった。

そして、帰省の二つ目の理由。それは私が帰りたかったからだ。幼馴染にして恋人のヴィーノに会いたかったから。家も近所で幼馴染、高校の同級生でもある彼は私の情熱を理解し、応援してくれる一人だった。

明るくて学校でも人気者の彼。家族同士の付き合いもあって、家にもよく遊びに来ていた。父を亡くしたときも元気付けてくれた。

そして、初めて料理を振舞ったとき、君なら世界で通用するコックになれる、自信を持ってと励まされた。それだけでも十分なのに、彼は私を好きだと言ってくれた。

例え付き合ったとしても私には料理の修業がある。傍にいられる

わけじゃない。それが悪くて返事を渋る私に、気持ちは変わらない、応援しているからと誕生日に指輪をくれた。
お互い学生なので、もちろんそう高価なものじゃない。だけど、嬉しくて料理の邪魔にならないように、ネックレスに通して身に着けた。それが私の気持ちであり、返事だった。
休暇の二日目、丸一日を彼と過せて私は満たされた。何があっても頑張っていけると思いは一新。難癖のあるカミーユにだって立ち向かえそうな気がした。
翌日は、帰省の理由の三つ目を果たす日。ブルーノさんの孫娘、ソニアに会うことになっていた。彼女が祖父の家の傍に住んでいたのはわずか半年ほど。
祖父の後継者である父親の仕事の都合とかで、すぐに引っ越してしまったのだ。
互いに生き別れるように号泣した最後の日。それから三年ほど経っている。
久々に祖父宅を訪れるという彼女を待つのは、街のカフェだ。当初、会う予定にしていたブルーノさんのお宅はその日来客があるとのことだった。どんなお客様なのかは触れないほうが無難だ。
先に着いた私は手持ち無沙汰だった。何もしないでいるのって難しい。どんな風に過したらいいのか分からない。
とりあえず席に座って、カフェ・マキアートを注文してみた。久々のイタリアの味だ。美味しい。ミルクが絶妙だ。
感心すると今度はエスプレッソとミルクの配分が気になり始めた。店員を捕まえようとしてはたと気付く。これはもう病気だなと一人苦笑する。
再びカップに手を伸ばそうとしたとき。
「Ｍａｎｉ　ｉｎ　Ａｌｔｏ！　（手を上げろ）」
鋭い声が聞こえて、背中に何か硬いものが押し付けられた。
硬直した私は恐る恐る振り返る。
「久しぶりっ、ミシェル！」

姿を確認する前に後ろから抱きしめられた。
背中に感じる柔らかいむにゅっとした感触。
ようやく体を離してくれたこの人物は、何処かで見たような女の子。携帯電話を片手に握り締めている。あれがきっと銃もどきの正体だ。
身に着けているのは、丈の短いタンクトップに短パン。カーディガンを羽織り、サングラスをかけている。夏満喫の格好だ。
「私だよ、ミシェル。見忘れた？」
彼女はサングラスを取って、にかっと笑ってみせた。
「もしかして……ソニア？」
私は上ずった声で確認した。
「当たり前じゃん」と彼女は笑う。
だって、三年前とぜんぜん違う。背丈は私を軽く追い抜いてるし、胸だって大きい。これがあの背中に感じた柔らかいものだ。思わず自分のささやかな胸と見比べてしまう。
栗色の髪は相変わらず短い、ベリーショートだが、それだってなんだかセクシーだ。耳にはピアスまでつけてるし。
何よりも声が大人っぽい。掠れた感じのハスキーボイス。
カフェにいる男達の視線を釘付けにしている。
にしても、何を食べて、こんな風に育ったんだろう。危うく真面目に分析してしまうところだった。
「可愛いネックレスつけてるね。ペンダントトップがリングかぁ」
こういう目ざといところは変わらない。
「元気そうで良かった。爺（じじ）、ミシェルになかなか会えないんで、すねてたよ。もう一人の孫娘の感覚なんだろうね」
彼女はくすくすと笑う。
この喋り方、やっぱりソニアだ。私はほっとすると共に久々の彼女に舞い上がってしまった。
だからだろう。つい前で愚痴めいたことを口走ってしまったのは。
それはもちろん、カミーユのこと。

「何そいつ。私がいたらぶっ飛ばしてやるのに」
ソニアは口を尖らせて、拳を握り締める。ここがフランスじゃなくて良かった。彼女なら、本当にやりそうだ。
「相手にしてないから。そのうち寄り付かなくなると思うんだけど」
自分でも半信半疑ながら、そう口にする。
「そうかなぁ」
ソニアもまた納得のいかない様子だった。

４．盆休み（後書き）

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします　（ランキングの表示はＰＣのみです）

5．お手伝い

楽しいお喋りの時間はあっという間に過ぎ、私たちは再会を誓い合って別れた。

墓参りも済ませたし、ヴィーノとのひと時を過して、ソニアとも会えた。

用はこれで済んだのだが、フランスに戻る前にブルーノさんに挨拶したかった。連絡すると、客人は帰ったというので屋敷へ立ち寄ることにした。

そこでは嬉しい知らせが待っていた。マスティフ犬、ラッテに子犬が産まれたのだ。

すでに他の子供達は他の家に引き取られていたが、黒と茶の毛色の二頭は彼女の元に残された。ネーロとカフェラッテだ。

母親のラッテの傍ですやすやと眠っている。まるでぬいぐるみ。

手を伸ばして触ってみたかったが、あまりに気持ちよさそうに寝ているので、ぐっと堪えた。起したら可哀想だ。

代わりにラッテの頭を撫でる。子供たちの傍に横になり、頭をもたげた彼女はゆったりと尻尾を振る。目を細める彼女が良い母犬であることは間違いなかった。

さて、ブルーノさんと会って近況報告も終えた。これで心残りもない。

早々にフランスに戻るつもりだったのだが、家で支度をしていると電話が入った。

それはレオからのもので、私に助けを求めていた。

何でも彼の息子がレストランを開いていて、コックの一人が急に病欠となり、人手が足りないらしい。彼自身が行ければいいのだが、ブルーノさんの食事を放って、それはできない。何とか数日手伝ってもらえないかという話だった。

師匠の一人である、他ならぬレオの頼みだ。断るわけにはいかない。
「二日三日なら、お手伝いできます」
フランス料理の修業を空ける日のぎりぎりのタイムリミット。それくらいなら勘が鈍ることはないし、迷惑も最低限で済むだろう。
レオもそれを承知して、それでもいいから手伝ってくれるとありがたいと言った。

レオによく似ているファビオは、父親をさらに柔らかくした感じで、人当たりの良い人だった。
彼もまた腕利きのコックであり、レオとよく似たエネルギッシュな味を作り出していた。
コックは他に一人。本来ならもう一人いて、つまり三人で埋まるはずの厨房はそれほど広くないながらも、清潔で使いやすいように工夫されていた。
私の話はよく聞いているからと、すぐに厨房に通して調理を任せてくれた。
まだ修行中の身である私が作って良いのだろうか。正直迷いもあったが、実際戸惑っている暇なんてなかった。
この店は近所では有名で、席は絶えず埋まり、賑わっていた。要するに厨房はいつも慌しく、料理以外のことを考える余裕なんてなかったのだ。
私にできるのは、この店の評判を落とさないように頑張ることだけ。今まで学んだことを発揮する場でもあった。
「あの人、昨日も来て同じ料理頼んだのよ」
「よっぽど好きなのね」
そんなウェイトレスの話を小耳に挟んだこともあったが、常連客がいるのは良いことだ。ほとんど気にすることなく、調理に専念した。
手伝い始めてから三日目、最終日になると、快癒したコックが戻

ってきた。これで、私の仕事は終わりだ。午前中で上がらせてもらおう。そうすれば今日中にフランスに戻れる。
最後の仕上げとばかりに調理に打ち込む。
そんな時、困った顔をしてウェイトレスが厨房にやってきた。
「さっきのオーダー、カルパッチョを作ったのはあなた？」
問いに頷くと彼女の眉がさらに寄った。
「いえね、お客がこれを作った者を呼んで来いって言うの。文句でもあるみたいよ。あなたはこの店の人じゃないし、ファビオさんに言ったほうが良いのかしら」
何か料理に不備な点でもあったんだろうか。
私は彼女に頼んで、その人の様子をこっそり見に行った。
指差す先には長いストレートの銀髪の人。最初女の人かと思ったが声が違う。コックはまだかとウェイトレスを捕まえて、大声で怒鳴りつけている。なんだか堅気の人じゃないみたいだ。
ブルーノさんとの付き合いがあるからだろうか。最近、そんな匂いを嗅ぎ分けることができるようになった。
相手の正体がなんだろうと、作った料理に何かあったのなら、それは間違いなく私の責任だ。
意を決して踏み出そうとしたとき、いきなり私のお腹に人の腕が絡みついた。腰を抱えられるようにして、実に情けない格好で連れ去られてしまう。
悲鳴を上げる暇もなかった。黒塗りの車に押し込まれ、訳の分からないうちに運ばれてしまった。

車が止まったのは空港の前。そこには私の荷物まで用意されていた。
フランスに戻れと言うのだ。人さらいだと思ったのはマロッチーニ・ファミリーの人たち、つまりブルーノさんの部下だった。
私を見張り、危険な人物に近づけないようにしたと言うのだ。

空港に入ると、すぐにファビオに連絡を取った。
彼は、私の声を聞いて心底安心したようだった。受話器越しにほっと溜め息が聞こえる。もう少し連絡が遅かったら、誘拐だと警察に連絡するつもりだったらしい。
マロッチーニ・ファミリーの人たちは私と知り合いだと言い残したらしいけど、ファビオは半信半疑だったようだ。
そりゃ、あんな風に店から連れ去られたんだもの。普通はそう思うよね。
彼が父親の仕事先のことをどれくらい知っているかも分からない。詳しく話すこともできず、「私は大丈夫」と繰り返すしかなかった。
結局、挨拶もせずに空港まで来てしまった。お店の人たちは良くしてくれて、色々教えてもらった。お礼だってちゃんと言いたかったのに。
そう告げると、彼は気にしないでフランスの修行に戻ったらいいと言ってくれた。
あの大声を出していた銀髪の客のことは、ちゃんと対処してくれたとのことだった。
クレーマーかと思いきや、私の料理を気にいってくれて、作った本人と話をしたかったのだと言う。
心配しなくていい、うちの店には色々な客が来るから鍛えられているとファビオは笑った。
なんだ、ブルーノさんの部下の早とちりか。
それにしても過保護すぎる。もう子供じゃないのに。
加えて乱暴だ。ほんとに人さらいと紙一重。いくらマフィアだからって、もう少しスマートなやり方があるんじゃないだろうか。
私はふくれっ面のまま、フランス行きの飛行機に乗り込んだ。

5．お手伝い（後書き）

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします　（ランキングの表示はＰＣのみです）

6．掌の孫悟空

甘かった。ちょっと考えれば分かることだったのに。

あまりにもタイミングの良すぎるレオからの手伝いの要請。ファビオの店での素早い対応。私は足止めされた上に監視されていたのだ。時間稼ぎは終わったので放免、そんなところだろう。

なのに、ぜんぜん気付かないなんて。のんきすぎる自分に呆れる。お釈迦様の掌の上で自由を宣言する間抜けな孫悟空の気分だ。

フランスの店に戻って、すぐに気付いた。

カミーユだ。

すれ違い様の彼の目ときたら。目つきがまったく変わってしまっていた。

挨拶しても返事さえない。こちらに寄ってこないどころか、近付くととたんに距離をとる。私にだけかと思ったら他の女の人に対しても同じ。挙動不審だ。

あまりに様子がおかしいので、こっそり店のウェイトレスに尋ねてみた。

返ってきた答えは予想通り。数時間前、店の裏に柄の悪い男たちに引っ張っていかれ、脅されていたと言うのだ。

「マフィアのお嬢さんに手を出したとかって。当然の報いよねえ」

ウェイトレス曰く、店に戻ってきたときには、何故か下半身パンツ姿の半べそ状態。「何でだ」「どうしてだ」と独り言を繰り返した末、「人畜無害そうな顔してんのに」と頭をかきむしって混乱した調子で言っていたらしい。

それから態度が急変。

もう女なんて信じられないと女性そのものに拒絶反応を示すようになったというのだ。

人畜無害って私のこと？　なんだか複雑な気分になる。

それにマフィアのお嬢さんって……。それもやっぱり私のことな

のだろう。
確かにブルーノさんは、娘のように思ってくれているのだろうけど、ありがたいの半分、困るの半分だ。
だいたい、女性大好きだった人が一変、恐怖症って変わりすぎじゃないだろうか。
確かに仕事の邪魔をされなくなって、助かったと言えばそうだけど。
遠目でもびくびくしているのが分かる。顔見知りの女性客に声をかけられただけで逃げ腰だし、今にも泣き出しそうな表情だ。女性客からも引かれている。なんだかちょっと気の毒に思えてきた。
……と、突然割り込んできた電子音。携帯電話の呼び出し音だ。
ウェイトレスさん、仕事中はせめてマナーモードにしておけばいいのにと思ったら、彼女は私の鞄を指差している。
私は携帯なんて持っていない。不審に思いながらもボストンバッグのファスナーを開ける。出てきたのはもちろん携帯電話、それも見たことがある型。私は通話ボタンを押した。
「チャオ、ミシェル！」
この元気な声、ソニアだ。見覚えがあるのは当たり前、これは彼女が持っていた携帯電話と同じ型だ。
「そっちはどう？　うまくいった？」
うまくいったって？　やっぱり彼女がブルーノさんに喋ったのか。
ちょっと待ってと彼女の言葉を遮り、好奇心むき出しのウェイトレスの前から逃げ出す。
店の奥にある自分の小部屋に入って扉を閉めた。これでやっと話せる。
「ソニア、どうして私の愚痴をブルーノさんに伝えたりしたの？」
私の言葉に彼女はくすりと笑い声をもらした。
「言ってないよ」
思いもかけない言葉を返してくる。
「爺（じじ）の耳に入ったら怖いことになるもん。気付かれないうちにやっ

ちゃうよ。ミシェルにも他の人にもね」
怖いことってどんなことって聞いてはいけない気がした。
やっちゃうなんて軽く言ってるが、かなりヤバめの話だと分かる。なんだか妙な汗がにじみ出てきた。
「じゃあ、誰が……」
「私だよ。私がお兄さん達に頼んだの」
お兄さん達？　彼女は一人っ子のはずだ。そう思ってはっとする。
空港まで運ばれる黒塗りの車の中で、男達はマロッチーニ・ファミリーの者だと名乗りはしたが、見たこともない顔ぶれだった。年齢も若そうだったし、割とくだけた格好。
少なくともブルーノさんの近くにいるような感じの人たちじゃなかった。
「本当は私がお仕置きしたかったんだけど、縄張りの外だと何かと面倒でさ。パパに頼む手もあったけど、ブレーキきかなそうだもん」
義父のご機嫌とりなんて、婿養子は辛いよねーと彼女は言う。
ブルーノさんの娘の旦那さんだから、色々と複雑なのだろう。彼もまた現役のマフィア幹部と聞いている。
彼女の言うお兄さん達っていうのもきっと……。
「にしても、ミシェル、予想外の行動とるんだもん。慌てたよ」
レオの息子の手伝いで時間稼ぎできると思ったら、早く戻ろうとするし、おまけにヤバい奴に関わろうとするしとソニアは続ける。
あのクレーマーもどき、銀髪の男のことだ。
闇社会でも有名な人で、なんとかというファミリーの……って人でってソニアは説明してくれたけど、分からない上に興味がないことは右から左に抜けていく。
「お兄さん達には流血は避けてってお願いしたの。ミシェル、そういうの嫌いだもんね」
なんでも彼らは脅しすかしのプロ。今回の彼女の頼みももちろん完璧。二度と女の子を困らせることなんてできないようにした、世のため人のための仕事だと自慢していたという。

そういえば、ウェイトレスの話だと下半身パンツ姿だったって。一体なにをされたんだろう。聞きたいような聞きたくないような。

「やっぱショックだったのかなぁ」

素人さんには刺激が強すぎたかもとソニアは笑っている。彼女が悪い子じゃないのは、よく知っているけど、これは少しばかり問題だ。

「気持ちは嬉しいし、助かったというのも本当だけど、こういうのはね」

私のためだからといって、こんなことをして欲しくない。

注意すると彼女はしょげ返ったが、ちゃんと分かってくれた。こんな風に素直なところはソニアの美点だと思う。私が見習いたいと思うほどだ。

電話を終えて店にも戻ると、すでにカミーユの姿はなかった。数日後、正式に店を辞めると連絡がきた。

結果的にはソニアの助けが功を奏した形になった。フランス料理の修業に打ち込めるようになったのだ。

数年後、結婚した彼が子供と奥さんを連れて、店に挨拶にきたという噂を耳にしたとき、私が胸をなでおろしたのは言うまでもない。

6．掌の孫悟空（後書き）

お話を気に入っていただけましたら、下のランキングの文字をポチッとお願いします　（ランキングの表示はＰＣのみです）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2842y/

運命のマスティマ　ミシェル過去編

2011年12月11日19時51分発行